

## 今日のみ言葉 220 「苦しみは神の真実のゆえ」 2012. 10. 7

わたしを苦しめられたのは  
あなたの真実のゆえです。  
あなたの慈しみをもって  
わたしを力づけてください。 (詩篇119の75～76)

In faithfulness you have afflicted me.  
May your unfailing love be my comfort.

ここには、深い神への信頼がある。神の愛を信じての信頼である。自分が苦しみを受けているとき、それはなぜなのか、例えば病気の苦しみの場合は自分の不養生、あるいは理由も思い当たらない、また体質だ…等々は思い浮かべるであろうが、その苦しみは、神の真実ゆえなのだ、というように受け取るだろうか。

私たちが直面する苦しみや悲しみなどは実にさまざまな理由から生じている。まったくの偶然的な災害、あるいは事故、また自分の罪、判断力の欠けたところから、さらに悪しき者たちからの苦しみ…等々。

この詩の作者は、そうしたさまざまな苦しみをも、そこに神が働いていないしるしだと受け取るのではなく、神の真実ゆえに自分に与えられたのだと実感しているのである。信仰とは、神の愛と真実、そして清さ、変ることなき正しさ等々を信じることである。その真実があるからこそ、私たちがどんなに罪を犯してもなお立ち返るときには赦してください。その真実があるからこそ、数千年にわたってそのような神を信じる人は絶えることがない。

私たちが直面する苦難は人によって大きな差がある。耐えがたいような苦しみに会う人もあれば、死にたいとは思えないほどの苦しみに終わる人もいる。しかし、何らかの苦しみや悲しみ、それが大きいほど、私たちはどうしてこんな苦しみがあるのか、しかも祈っても祈ってもその状況が変わらないのか…と信仰も揺らぐことがある。

そのような時にこそ、私たちは神の真実を信じ続けていくことが求められている。この詩の作者は、人の真実は揺らぐことあり、裏切ることはあっても、神の真実は決して変わらないことを確信していた。そのうえで神の慈しみ—愛によって力づけられることを祈り求めた。

私たちの日々も、そして苦しみのときにもこのように神の真実を信じ、その愛を求め続けていきたいものである。

\*\*\*\*\*

野草と樹木たら                      ヒガンバナ                      2012. 10. 4                      徳島県小松島市

ヒガンバナは、緑の最も濃い9月に時期を定めていっせいに野草とは思えないような華麗な赤い花を咲かせるゆえに、また葉を見せずに咲くというほかの多くの草花とは異なることもあり、また人間には有毒なリコリンという成分を含むということなどから、特に昔から知られてきた花です。

日本全国に分布している花ではなく、東北や北海道では見られない花で、北海道に行ったとき、ヒガンバナは見たことがないと言われた人がいて意外に思ったものです。

残念なことに、ヒガンバナは、日本では間違った知識、言い伝えのゆえに広く愛好されることはなかったといえる花です。

この花が、野草として見られるのは、山でも人家のある付近に多く、ほかの野草のように



まったく人家のない、人のすめないようなところに咲いたりしないために、このヒガンバナは人間の生活とかかわっていたことが推定されています。

この花の球根（鱗茎）は、良質のデンプンを含んでおり、水でさらすことによってリコリンが水に溶けて除かれ、デンプンが残って食用になり、冷害などで米ができず飢饉となったときには、それを食用としていたと言われています。また、薬用としても、漢方では、咳止めや去痰、催吐薬に用いるとのこと。

有毒成分を含むといっても、冬に美しい花をよき香りとともに私たちに見せてくれるスイセンもヒガンバナ科であり、やはり同じリコリンを持っています。

以前に、スイセンの葉をニラの葉と間違えて食べて中毒を起こしたことが報道されていたようにスイセンも有毒成分を持つ

ているのですが、こちらのほうは全くそのような有毒植物という意識を持たれていないのです。マンジュシャゲとも言うのは、サンスクリット語で、マンジュサカという言葉があり、それは「赤い花」、「天上の花」を表すことから来ているといえます。

ヒガンバナの仲間としては、山に見られるキツネノカミソリや、花の美しいナツズイセンなどがあり、さらにこうした花から多くの園芸用品種が作られ、リコリスと総称され、50種ほどにも及び、ヨーロッパでは、愛好されており、日本でもヒガンバナを道路の中央分離帯の街路樹の根元にたくさん植えているのを見たことがあり、次第に、愛好する人、庭に植える人も増えています。

私の子どものころは、ヒガンバナに対する偏見、間違った考えがあり、さわってもいけない、などと言われたものですが、それはまったく根拠のないことです。昔は植物に対する正しい知識がなかったため、こうした間違った言い伝えが未だに残っているのです。

ヒガンバナの球根は深く土中に入り込んでいて、移植ごてなどがないと採取できないものですが、付近の畦道などから採取して庭に植えると毎年鮮やかな花を咲かせてくれます。ヒガンバナの独特の美しさ—とくに緑一色の山野に咲く姿はほかに類のない光景を生み出すものであり、初秋の美しい彩りとなっているゆえに、この花も神の特別な被造物の一つとして、愛好するようになりたいものです。（写真、文ともT. YOSHIMURA）